

産業競争力

日本の未来を考える前に世界の産業競争力を見てみよう。

西欧、米国、東アジア、インドはそれぞれどうか。

アセアン全体の生産年齢人口比率は2020年代にピークアウトする。

少子高齢化の暗雲が立ちこめる日本だが悲観するには及ばない。

天下無双の米国、しぶとい英連邦 “ラスボス”として登場するインド

川口盛之助 盛之助 代表取締役

日本の未来について議論を始めると、いきなり少子高齢化という強烈な暗雲が立ち込め、心が萎えそうになる。そこで気分を変えて外の世界を眺めてみよう。内向きの話ばかりしていると、どうしても隣の芝が青く見えるものだが、順風満帆な国などあるのだろうか。

【西欧】 まずは長年目標にしてきた西欧を見てみよう。命運を託したEUの枠組みは息切れ気味だ。移民問題や世代間格差、地域間格差など、統合の負の側面が顕わとなり求心力は下がる一方だ。EUの結束が緩むことで最も苦しくなるのは、通貨安メリットを享受してきたドイツだ。長く続いた円高に腐心し、製造業の海外移転を断行した日本とは対照的に、いまだにモノの貿易黒字で賄っているのがドイツだ。

機を見るに敏い英国は、早々に見切りをつけ脱退の道を選んだ。英連邦圏内にオーストラリアやカナダ、南アフリカなどの資源大国を持つ彼らにとって、泥船EUからの退出とは合理的な選択なのだ。

【米国】 かたや米国は、各地への軍事関与を減らし始めた。世界の総軍事予算の半分以上を一国で費やすという無茶も長続きしない。ハイテク先進国の米国だが、実は貿易黒字の筆頭品目は農産物という世界最強の農業国だ。これまで唯一のアキレス腱がエネルギーだったが、シェール燃料の開発に成功し、いよいよ自活できる構えとなった。

万が一、世界から孤立しても悠々と生きていける唯一無二の国なのだ。米国の芝だけは本当に青々と羨ましい。一見破天荒なトランプ氏の主張だが、実に当を得た米国の本音を語っている。今後、相対的な国力の

低下とともに米国は内向きになっていくが、その負の影響は米国以外においてはるかに大きいということが悔しい。米国がこれまでおせっかいにも担ってきた世界経営の手を少し緩めるだけで、世界は大混乱に陥る。海上輸送路の安全確保だけでも各国に求められる負担は甚大となり、疲弊を余儀なくされる。無敵の米国に対しては、例え“ポチ”と蔑まれてもびったりついていくのが肝要だ。

【東アジア】 日本の成長モデルを踏襲し、成功を取めたのが韓国、台湾、中国などの東アジア諸国だが、彼らの展望はどうか。我が国でバブルが弾け、長い停滞にあえぐ姿を尻目に我が世を謳歌した彼らもいよいよガス欠となった。日本から遅れること20年、2010年代に入っついに彼らの生産年齢人口比率は減少に転じた。これから急成長の代償を払うオーナス期に入り、深刻な社会不安が続出するだろう。

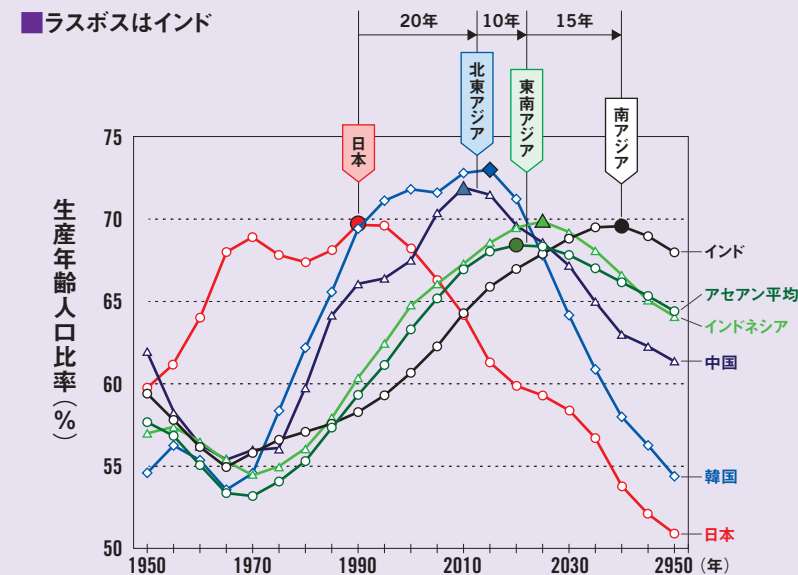
経済成長を求心力とした国家が潮目を迎えた時、往時に蓄積した底力が問われるわけだが、彼らには技術を支える基盤科学力を培う時間がなかった。見よう見まねで比較的簡単に事業化できた造船や鉄鋼、電機等の産業分野では、リソースを集中投下して「張りぼて」を作る二番手商法には成功した。しかし、簡単に真似できたものは、更に簡単に後続組に真似されることを意味する。すでに衣類や家電など軽工業分野から、アセアン諸国に向けて生産拠点の移管は加速している。その一方で、後回しとなっていた電子部品や機械部品類、基幹系のシステム商材の領域では、二匹目のドジョウが見つからないことに気付いてうろたえている。今後この種の扱いやすかった工業製品は、北東アジアと

東南アジアの間で争奪しあう消耗戦状態に陥る。

グローバル化が進み、ヒト・モノ・カネの流通速度が高まる今日では、国全体の底上げをする余裕は与えられない。韓国や中国などは、工業力らしきものを手にしたとたんに、自国の高齢化に追いつかれてしまう。成長している間に、ストックされたはずの知の蓄積はあまりにも貧弱だ。早晩弾け散るバブルの正体は、金融バブルではなく知の虚構だったということがホラーなのだ。次の主役と期待される東南アジアだがアセアン全体の生産年齢人口比率は早くも2020年代にピークアウトする。そしてその後続く南アジア・インド経済圏との間でパイの奪い合い状態に入る。

【インド】 インドのピークは更に20年先の2040年代と猶予がある。一人っ子政策をとらず、民主主義が根付いた社会環境で緩やかに成長する道を選んだインドは、その衰退も遅いという果実を得る。いずれやって来るラスボスはインドなのだ。

【日本】 幸いなことに、我が国の科学工業の発達には明治以来150年という時間的猶予があった。じっくりと国民の基礎教養を高め、骨太な先端科学力を磨くことができた。21世紀に入ってからのノーベル科学3賞の獲得数では、英・独・仏を抜き去って、いまや米国に次ぐ知の集積地となった。国民の民度を計る国際成人力調査(PIAAC)の結果をみても、我が国の一般国民の計算力や読解力のレベルは世界トップであり、同時に上下の点数の少なさでもダントツという偉業を成し遂げている。



出所:UN World Population Prospects

日本は欧米先進国からハイテク産業のシェアを獲得してきた。数多くの彼らの産業を滅ぼしてきた歴史ともいえよう。同じ構造で、日本からも少なからぬ産業が東アジアに奪取されたが、述べた通り、ここに至って彼ら自身が早くもガス欠という事態に至った。今生き延びている我が国の素材や部品産業などは、結果的に日本にだけ取り残された戦略商品となる可能性が高い。日本は「最後の先進国」として「残り福」に恵まれるのだ。

世界運営役の重荷を人質にして開き直すこともできる天下無双の米国。大英帝国の残滓たる英連邦の一翼を担う「アジアの欧米」オーストラリア。そして、ラスボスとして先物価値の高いインド。おれずにこの3国とよしみを通じておくことが、我が国の将来を約束することになる。東アジアの暗雲が晴れてきて、その構造が明らかになってきた。■

川口盛之助(かわぐちもりのすけ)

1984年、慶應義塾大工学部卒、イリノイ大学修士課程修了(化学専攻)。技術とイノベーションの育成に関するエキスパート。戦略コンサルティングファームのアーサー・D・リトル・ジャパンにおいてアソシエイト・ディレクターを務めたのちに株式会社盛之助を設立。国内のみならずアジア各国の政府機関からの招聘を受け、研究開発戦略や商品開発戦略などのコンサルティングを手がける。著書「メガトレンド」シリーズは独自の的方法論から導き出す精緻で広範な未来予測分析を行い、各界で高い評価を受けている。